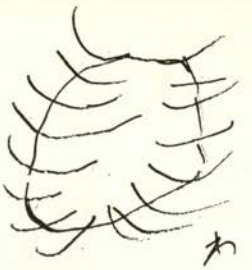
随想三題



え・津高和一

柿の木

和田悟朗

〈俳人〉

わが家のあまり広くない庭に一本の柿の木があった。初めて実がなったのは今から何年前であったかは忘れたが、せいぜい一メートル少々の高さにもかかわらず、意外と不釣合に大きな実を二個ぶら下げていた光景だけは、はっきりと覚えている。

実の数はそれ以後、年々ふえていった。たしかに成り年と不作の年とは交互にあらわれたが、木が成長の途上にあったのだから、不作の年には前年より少しだけふえ豊作の年には一躍ふえて、十年ほどして何百という数も実るようになってしまった。

秋が深まるにつれて、柿の実の色は美しくなり、手の届くところから二つ三つと取っては食べた。そしてきまったように、文化の日の午前、椅子や踏台を庭に持出して、ある限りの実を一挙に収獲した。幹は私の体重に堪えるほどの太さにはなっていなかったから、踏台を根の周りに移動させながら危い姿勢で一つづつもぎ取った。身軽になったしなやかな枝は、そのたびに秋の天の方へ立ち上った柿の実はうっすらと白い粉を吹いていて、もぎ取ったときの指紋が残っていることもあった。木がしだいに大きくなるにつれて、地面に置いた椅子の上で背伸びしたくらいでは、もはや届かない実も現われるようになった。

そのようなころ、私たち一家はこの柿の木を放置して、まる二年間アメリカへ行って暮したが、帰国して草ぼうぼうと茂った庭の中に見出したのは、この柿の木の枯れた姿であった。真夏であったが一枚の葉もつけず、小枝を曲げてみると、実をつけたころのしなやかさはすでになくて、ただぽきりと折れた。枯れてからもうかなりの日数がたっていた。冬枯れのたたずまいとは、また異った姿であった。

この木が生きていたとき、しかし、私たちは特別に注意深く手入れをしたり面倒をみたりしていたわけではなかった。寒肥を入れたり、夏の日照りに水をやったりもしたが、それも怠り勝ちだった。ただ柿の木は、日夜私たちが見ている前で自然に育っているようにみえた。

だが考えてみると、もし私たちが見ている前で、この木を枯らすような原因が起っていたならば、私たちはそれに気が付いて何か適当な処置を講じ、柿の木を枯れることから救っていたにちがいない見守るということ、あるいは育てるということは、つまり重大な結果に立ち到る前に、さりげなくその芽を摘んでおくことではあるまいか。私たちの目には、柿の木はただ順調に成育しているようであったが、実は私たち自身さえ意識せぬうちに柿の木を救っていたことがあったろう。不運にも、私たちがいないときに起った不幸の芽は、摘まれることもなくずるずると拡大していって、ついに柿の木の命取りになってしまった。この小さな芽は、一匹の害虫であったか、一なぐりの外力であったか、あるいは一週間の旱りであったか私には分らないままである。

柿の木のあった場所に、近所の人からもらった「なんきんはぜ」を移し植えた。葉の形は少し白樺に似ており、紅葉の何とも見事な木である。

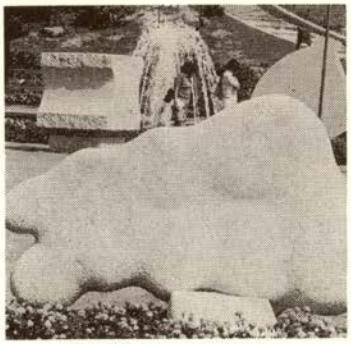
須磨離宮公園 野外彫刻展雑感

小林陸一郎
〈彫刻家〉

何もしたくない日というものがある。どんなささいなことにもかかわりたくない、そのくせ何かをしていないと落着かない。そんなある日須磨離宮公園に出かけた。晴れるような曇るような特に変化のない日だった。

全く、忙しさのため陳列にも立ち会わず、場所の希望もそこそこに一任していたのが気にかかったのである、それに公園そのものもまだ見ていなかった。自分が出品しているということとともに、展示された作品を見に行くということは、いつもかすかな不安と期待を持つもので、まづ何もしたくない一日をやり過ごそうというわけである。

さて作品はというと、完成と同時に別の世界のものになり作者の手の中にとどまってはいないのでお互いに同じ社会のよく似た別々の位置に置かれる。あとは作品自体に何が起るかをまかせてしまって、作者はのんびりしていれば良いのである。というと無責任のようであるが、制作途上にいろんな期待や実験を表現しようと試みながらも完成と同時にその関係は親と子のごとく非常に責任があってしかも無責任でもあらねばならない。またよく似ているが違う二つというようなものになるのだろう


公園におかれた小林氏の作品

そして公園はと、電車の中でいろんな事を考えながら須磨の駅についた。駅より北へかなり行った所で交通量の多い道路に面して入口があった。大へんさわやかな公園である。緑の多いそして空気の新鮮なことは心をなごめてくれる木にかこまれてなだらかな坂道を登って行くと公園の中心部に到り美しい噴水が風でしぶきを飛ばしており、下を見下ろせば遠く波に光を輝かせて海が見え、解放的な空間の広がりを見せている、作品は噴水のまわりの芝の上、階段の広い踊場、又噴水の中にと思い思いの姿をみせ、石、木、金属、プラスティック、水面で動いているもの、風に動くもの、美しく彩色されたものと多彩であり、全体を見わたして各々の作品がよく見えるようまく展示されており、しばらくは見て廻るのに忙しい。少々歩き疲れてほっと一息入れたがどうも美しい公園に居るというより作品が公園中の空気を大きく吸い込んでしまってなんとなく息苦しく、落着かない気分になったものである。実はむし暑い日なのに着ていった上衣をぬがずにいたのが息苦しい原因で朝の気分が残っていたせいでもあるが、現代という非常な多面性を持つ社会の中から生れて来た作品群が多彩な小声を出し合って響いているというせいではないだろうかとも思うのである。また涼しい晴れた日に来てみようと思う。

その後、数日間に見に行った人々の多くが、夜間の方が幻想的だし美しいと話してくれた。忙しさの中で未だ夜の公園に行く機会を得ないのが残念だが、確かに夜の方が美しく感じるかも知れない。昼の光線の中で整然とした公園はあるいは、この多くの作家の魂を

包容する力を持たないのかも分らない。が、夜は全てを包み込んでしまう。その中で光に浮び上った作品群から、夢や希望や苦悩、よろこびやいたづら等の精が飛びかう様がよく見えるからだろう。この野外展には、風と彫刻、水と彫刻、夜(光)と彫刻という三つのテーマがあるが、夜(光)と彫刻というテーマが成功を得たともいえるだろう。ともあれ、もう一度ゆっくりと一日の変化のなかにまた四十日間の変化のなかに置かれた作品がどの様に息づいているかを確かめに行って見たいと考えたのである。

初心忘るべからず

永井和子
〈声楽家〉

なぜ私は歌手を志したか？　それはもの心のついた頃より音楽が好きで、何か音楽で身を立てたいと強く思っていた。それには一番身近に〝声〟というただの楽器があった。

ある日母が、幸か不幸かやっとの思いで私の要望を聞き入れてくれて、声楽の先生の門をくぐった音楽に関しては全く無知な母は「この子は歌手になりたいといいます。その素質はあるでしょうか」と、そして「自分からのたってのお願いなので遊び半分のつもりではないでしょうが、うちの家庭ではやるからにはお嬢様芸では困ります。どうでしょうか」と即答を求めた。そばで聞いていた私もどんな答が返って来るかと祈る思いであった。するといとも簡単に〝まあやってみなさい〟、それだけだった。母も仕方なくしぶしぶ許し私も無限の夢をいだいて〝いづれ親孝行は充分致します〟と大きい口をたたいて始めたのが病みつきで、今だに足があらえず、親孝行もできずに現在に至っている。

しかし、出発が出発だけに苦しいから、いやになったからといってなげだすことはこの私には許されないのだと自分にいい聞かせているうちに、いつの間にやらそれが執念に変って行った。

外にあっていい様のないつらい事やいやな目にあった時、普通の家庭の主婦の様に、控え目でつつましやかで、家庭の幸せのために家庭の中を我慢強く守ることに生き甲斐を感じている、そんな女性に途方もなく憧れ、よき伴侶にも子供にもめぐまれ、女としての幸せな生活に今すぐにでもとびこんでぬくぬくと暮そうと思えばできる立場にありながら、何を好んで自分をいじめねばならないかとどうしても足をあらえない自分を憎らしくさえ思われる時がある。

しかし私は、まだまだ未来の可能性をすててはいない。私にはもっともっと精神力旺盛でなければいけないと心のどこかで私を励ましてくれるのである。歌手は人の前でうたうもの、そのために技術をみがくことはもちろんのこと、なるべく美しく、清潔で少しでも教養高くありたい。いくらメーキャップをしてもその人柄は隠せるものではないと思うにつけわが身が恥かしくなるのだが、今日知って明日身につくというものではない。その得体の知れない教養というものを私は存分に欲しい。そのために出来るだけ視野を広め、どんなことにもくじけない精神力を養い、素直で明るく、さらりとしていてそして時代の先端を一生懸命生きたい。

いろいろな人の指導を受けてただひたすら過して来た私に、オペラの初主役が与えられた。天にも昇る思いで、初めて習った先生の所へ報告に行った。

〝あなたが初めて来た時お母様がお嬢様芸では困りますと仰っしゃいましたね。うれしいですよ〟と……。その時初めて知った。知らず知らずのうちにこの執念にも似た音楽への思いは、この先生から教わっていたのだということを……。そして自分にもいい聞かせるのだった。初心忘るべからず……

★ある集い★その足あと★

服飾研究ぐるーぷ
「もでりすとさーくる」

妹尾光子
〈もでりすとさーくる事務局長〉

「私たちの学校には、卒業生の草美会という大きな集まりはあるけれど、枠をはずして服飾の仕事にたずさわる人々で研究ぐるーぷを作って、月に一回研究会を開いたらどうかしら……」

と、神戸ドレスメーカー女学院の福富芳美院長から声がでたのは今から三年前。

「それはよろしいナ」といったら「そんなら、あんた世話役頼むわよ」と私に事務局長のおはちが廻ってきたわけである。

ともかく女性の集まりは難しい三人よっても姦しいというぐらいだから、二〇〇人の会員さんをすべて満足させる献立づくりは大変だ。しかし、神戸の服飾界では、プロの研究会は少ない。勉強したくとも、世にでたくともチャンスがない。何より実行が肝心とはじまった「もでりすとさーくる」は会員さんの熱意とあいまって、三年を迎えた。

デザイナー、洋裁学校経営者、先生、洋裁店主、人形作家など多彩な顔ぶれで、会員には補欠ができないと入会をみとめない仕組。

月に一度の研究会は、服装史(大丸弘)スタイル画(青木一夫)帽子(佐々木裕子)立体裁断(大橋雅子)造花(井口さく子)絵更紗(赤木久仁子)さんなど、実習2講義1の割合で開く。毛皮の話、化繊の話など実地に結びつく講演をきいたり、春秋2回パリコレクションの解禁2、3日後の16ミリの映写会。年に一度の見学は、芯地工場の見学、美術観賞など遠出をすることになっている。

個人ではとうてい、吸収することのできないことが、一つの巾広い層のぐるーぷにまとまれば、講師陣にも良い人が呼べる。

またベテラン、中堅、新人が一率に研究会で勉強するのではげみになる。

同じ道を進む人々の交流は、また新人を生みだすチャンスにもなるわけだ。

そしてこの「もでりすとさーくる」の月一回の集いは、ひるの部とよるの部の二回にわけて開いていることである。ひる間、勤めている人々にとってこのよるの部も大変人気がある。

神戸には服飾関係のメーカーも商社もないので、新人を育て、バックアップする人たちが少ない。

だから、次の神戸の服飾界の世代を、育て、ひきあげる会にもしてゆきたいと思っている。ただ「もでりすとさーくる」は営利事業でないので、仕事を持つ人々をあきさせずプランニングしてゆくのはほんとに難しい。しかし、やはり好きなことだから、シンドイと悲鳴をあげながらもやりつづけていくことだろう。

そろそろ「もでりすとさーくる」で、来年は欧州へ服飾研究にゆきましょうという声がでているきっと楽しい旅行になるのではないかと今から心待ちしている。

★事務所　神戸市生田区加納町2丁目　神戸ドレスメーカー女学院内　「もでりすとさーくる」
TEL㉒七七三一

グラビヤ七頁参照ください

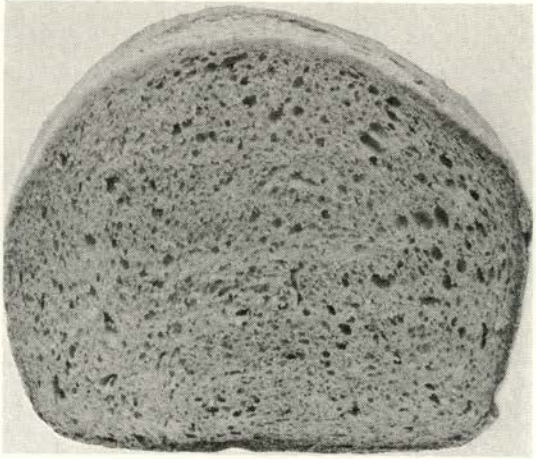
紳士洋品の店

千秋屋

元　町　店〈元町4丁目〉TEL 34-6959

メトロこうべ店〈神戸駅前〉TEL 34-0550

新製品



キメの細かさを見て下さい

ルドルフ
コッホ

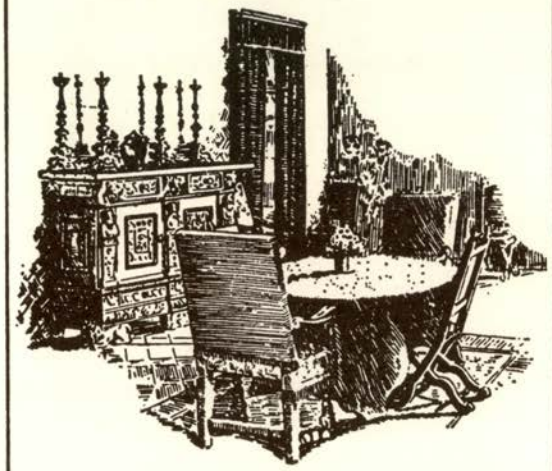
ドイツパンの本格派です！

フランスパンと違ってキメが細かく味は最高です。
技術者もパン窯もすべてドイツから神戸のベルへやってきました。

フランス菓子 ベル

三宮センター街・さんちか・六甲山頂・大阪富国ビル

家具・室内装飾・工芸品



永田良介商店

神戸市生田区三宮町三丁目・大丸前・電話神戸（39）3737（代表）
東京店・東急百貨店　日本橋店内１階　03（211）0511
本　店（渋谷）６階　03（462）3180

お歳暮に

瓦せんべい
クリームパピヨン
市内地方配送承ります

亀の井亀井堂本家

神戸三宮トア・ロード電話　本店33－0001　南店33－1616
さんちかスイーツタウン　電話33－6532

□随想□

しつけ

朝比奈　隆

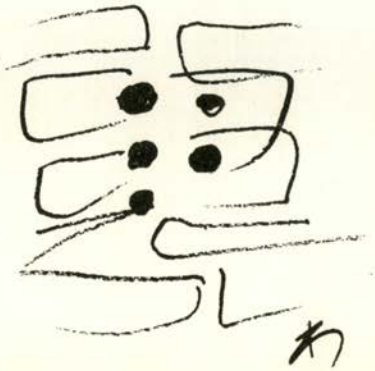
え・津高和一

おこがましくも十月十日に、私は知事の依頼で兵庫県教育委員会の委員に推され、私もその重責をお引き受けすることにした。今までの私は仕事がら、人に教えたり、教授する立場にあり、私自身も文化畑で育ってきたので、教育とまったく縁がなかったわけではない。しかし、私の使っていた教育という言葉は、あくまでも教える側、すなわち私と教えられる側、すなわち弟子や学生の間でかわされる教授、被教授の枠を越えるものではなかった。それゆえ、法律に従って行なわれる、いわゆる教育行政に接することはほとんどなかったといってよい。

元来、教育委員会の委員、職員というのは教員が教育に対する実績、熱意を認められて就くものであり、教員出身者を常とした。それだけに、私にはいささか場違いな感じがしないでもないが、もちろん私は私なりの希望、抱負をもっているのでお引き受けしたのである。

兵庫県教育委員会は他県に先がけて高校入試を改革したり、夏休みの宿題を全廃したり、モデル県として全国に鳴り響く実績をもっている。しかし、兵庫県は広い。その広さは表と裏の格差でますます広く感じられる。陽のあたる瀬戸内沿岸に比して陽のあたらぬ地方ははるかに広い。これら陽のあたらぬ地方は諸々につけて遅れている。とりわけ文化活動においてはその機会がほとんどなく、あるといえば学校の文化祭か記念祭ぐらいなものであろう。私もオーケストラを率いて演奏にいったことがあるが、私の体験からも地方文化の遅れと、文化浸潤の必要性を痛感したのである。私が教育委員になる決意もそのあたりから由来したといえる。神戸、阪神間のエネルギーを分散させ、地方文化を高揚するすべに考えをめぐらせる今日この頃である。

最近、私と同年輩の大学の教授たちが学生の問題に頭をいため、四苦八苦しているが、たしかに当節では教育の概念も変化しつつある。教授や教師が学生、生徒にていねいな言葉を使い、君づけ、さんづけで呼び、学生達はそれでけっこう喜んでいる。これもその変化のあらわれといえるかもし



れない。私の場合は分野が違うので比較はできないが、師弟のような間柄で、私の言葉はあらく、どこのお嬢さんであろうが呼びつけにする。叱りつけることもしばしばである。だからといって弟子や学生たちと対立したり、疎遠になったりということはない。教授すべきことは教授し、平常は若い人と同じようにダベリ、仲間のようなつきあいをしている。だからお互いの意思疎通には何ら支障はない。上の者と下の者が裸でぶつかりあう戦後の教育に欠けるものはこれである。上下が接する時、大切なのは心の姿勢、体の姿勢である。上の者は勝っているもの、秀れているもの、尊敬されるべきもの、それらがどこかにあるはずだからそれを表に出すべきである。教授、教師の毅然とした態度に学生や生徒たちの信頼を得、好感を呼ぶ。おい、こら、ばかやろう、も愛情のあらわれである。そこには誠意と信頼がいきかうのである。

教師に礼をしないとか、目上の者に対して礼儀を欠くというのは世界共通の現象らしい。しかし考えてみれば、ドイツにも Jugend hat kein Tugend（青年は道徳を持たない）ということわざがあるように、近頃の若いもんは、という言葉はいつの時代にも使われる言葉である。だから一方的に若者を責めるのは酷であり、自身の若い頃をふりかえれば、誰しも身におぼえがあるはずだ。

戦後の教育で際立った現象は親が非常に教育熱心になったことである。それでいて親たちは家庭教育本来の姿も意義も忘れているようだ。子供は生まれた時から、みんなから可愛い、可愛いといって育てられる。何をしようが子供のすることだからといって許される。それでいて勉強だけは押しつける。これでは全くの片手おちである。やがて親に対する信頼感が薄れていくのも当然のなりゆきである。

西洋人は子供たちに対して厳しい。とくに母親のしつけは厳しい。ヨーロッパの義務教育の小学校は昼までで、家で昼食をすませた子供たちはのびのびと跳んだりはねたり。しかし、そんな時でも大人たちの目はきびしく光っている。夕食がすむとキスをして無理にでも寝かしつける。日本の子供たちと生活のリズムがまるでちがっている。ヨーロッパでは演奏会が遅くから始まるのもそのためである。子供を寝かしつけた親たちは八時頃から盛装して、演奏会、レストラン、パーティなどに出かける。そこには親の生活があり、家庭がすでに学校であると考える親たちにも自分たちの生活が厳として存在する。子供に対して厳しいのは親だけではない。電車の中で行儀が悪ければ他人でも叱る。親子づれでレストランへ行けば、親にむかっては旦那さま、奥さまと敬語を使うボーイが、子供にはお前は何を食べるか、お前は子供だからオムレツにしろ、と命令形でくる。子供が粗相をすれば、親が叱る前にボーイが叱る。社会全体が学校である。

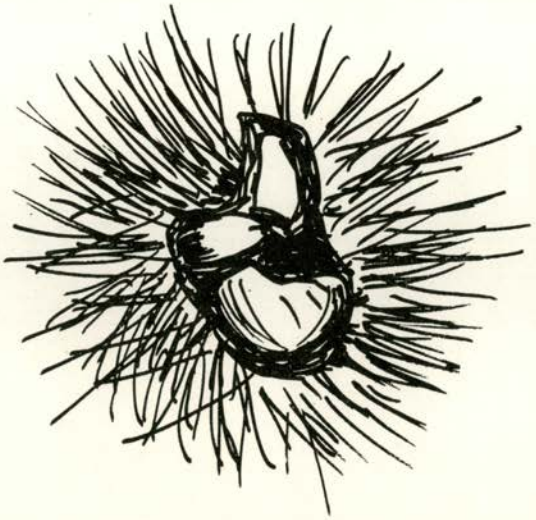
厳しいからといっても親の愛情にはいつこもかわりない。先に述べた教授や教師の姿勢は家庭の親についてもいえることである。親の子供に及ぼす影響、家庭教育の必要性を理解し、人間と人間の関係である教育の本質をあらためて認識すべきである。家庭こそ教育の場であり、何ものにもかえがたい学校である。

〈音楽家〉

□随想□

思うがまゝに

原　泰良〈カットも〉



生産者米価が上り、消費者米価が上ると、世の中の奥様連中は、この時とばかりお冠をまげて、有象無象もこれに追従する。豊作で政府は在庫量がふえてねをあげ、農相はこれが対策として、沖縄へ救援物資として送り一石二鳥をねらおうとされている。

米のことをいうならば、池田さんが貧乏人は麦めしをたべろで、大分悪評を蒙った時代と僅かの年代で、実に雲泥の差である。これがもう少し前に遡ると、お米は銀めしとして、貴重品扱いをされたのも、ついこの間のこと、この貴重品扱いも今では身体上よくないとあって、猫も杓子も米飯を健康の敵であるといいはやしている。面白いフェーン現象である。米食さえしなければ健康が保たれ、米をたべないことを、さも高級人の如く考える傾向がでてきた。錯覚も甚だしい。先日も紙上で某大銀行の頭取が、さも米食しないのが進んだ階級のごとく筆を走らせて、うなぎ丼とカレーライスでは、やむなく米をたべるといい訳されていたようだ。総じて日本人は右や左で大振りしすぎる傾向がある。振子のことだからやがては正位に落付くもんだろうが、大頭取までがカレーライ

スや、うな丼まで引出して、賢しそうにしなくてもよさそうなもんだ。

大振り小振りの話だが、戦争中は陛下の赤子として、命を鴻毛よりも軽んじた思想も、戦がすめば又、口をそろえて初めから反戦論者であったかのごとく擬装する微苦笑的な事実も散見された。

私はうなぎ丼とかカレーライスに限ってめしを食うというような詭弁は弄しない。鮨がうまければどんどん平げもする。特に鮨は昔からお祭りにはつきものの日本人独特の料理で、日本料理の生粋のものの一つである。試みに米国へ行って、あの肉類ぜめにあったら、淡白なめしの味や、鮨の味は又格別である。この頃シーズンの松茸には、吸物と米飯はつきもので、明治百年をたべてきた日本食である。白飯を不健康視することは、どんなものだろうか。

私の姫路の在宅の入口に「固寧倉」なる額がかかげられているが、宅の西北隅にこの「固寧倉」があった。ちょうど昭和二十六年まで、その面影を残していたが、倉を借家人にくれてやって、現在はこの額のみが名残りをとどめているが、この倉こそ徳川時代における固寧倉であったのである米のことを書いたついでに、この固寧倉にふれるが、文化六年に藩主が大庄屋から義倉の建議がなされ、幕府の儒官林大学頭に嘱して固寧倉と命名し、社倉の外にこの義倉法を施行した。固寧倉は蓋し書経の「民惟邦本、本固邦寧」の語にいでたもので、戸長、豪家などの志あるものから、村民のために米麦を醸出し、これを蓄積して、一朝事ある時に放出した義倉である。

多少いいすぎかも知れないが、米があり余って沖縄まで送ろうとするとき、この義倉法にならって、多少原価を割ってでも、世の中の杓子を楯にふる奥様連中にうるおしてあげる位の政治家が欲しいもんだと思うのである。なお、余談だが、この私の固寧倉の倉は、昭和二十六年まで月々八十銭の家賃を頂戴していた。家賃を値上げしない私も私なら、月々八十銭宛持って来た借家人も心臓ものである。

物価のついでにもう一言、私の固寧倉の家賃はほほ笑ましい一件ですんだが、笑うに笑えぬ事実がここにある。

私の商売は電鉄屋だが、その電鉄で泣いているのである。電鉄の運賃は安いものの最たるものである。昭和十一年を一〇〇とする物価指数で、運賃は一七四倍だとさわいでいるが、消費者米価が六二〇倍、散髪料は九五四倍、電動客車が六〇〇倍、枕木は一〇五四倍で昭和十年頃五万円で買えた電車が、いま三千万円もする。一般物価が少くとも五、六百倍になっている現在、その物資を購入して施設を増強している民営鉄道の運賃が、一七四倍に抑えられているという事実から考えてもそれだけでも、鉄道経営の苦しさが分ると思うのである。

私の家の固寧倉の、月八十銭の家賃のごとく、物価をすべて運賃なみに抑制できたら、この世はどんなに王道楽土になるだろうか。

〈神戸電鉄社長〉

れんさいずいそう VI
Rocking Chair

生き甲斐のある老後生活

十河巌〈随筆家〉

お鉢にインスタントラーメンをぶちこんで上から熱湯をそそぐだけで、ひるめし代りのラーメンができあがるお手軽な点からいうと全く便利なものが流行りだしたものだ。

ラーメンばかりではない。日本人の日常生活にしみこんできたあらゆる種類のインスタントラーメン的文化というものは、多少の抵抗があってもどんどん実際の生活面に突進しているようである。

数年前にヨーロッパ旅行をつづけたことがある。そのとき北欧の社会民主々義三国を訪れた。三国で最も発達している老人保護施設といわれているスエーデンのストックホルム市のサバッツベルヒ老人ハウスをつぶさに見学させてもらった。

その老人ハウスでは六十五才になると国家と市との養老年金を合わせるだけで、横すべりにぞろっとそのまま入所することができる。入所する老人たちは幼い孫たちのために別居(Separate)したんだといって、決して老人ハウスへ追いこまれたといったような僻心は持っていなかった。十畳敷ぐらいの部屋へ元の家庭からもちこんだ洋服ダンスやデスクに画額などを飾りたてて、ホテルの客室よりも落ちついたいかにも居心地のよさそうな部屋につくりあげて住んでいる。

家族のあるものは週一回、少いものでも月一回ぐらいは必ず家族多勢づれがタクシーで訪問し、特別の台所で食事をつくり、家族そろって会食して団欒のひとときをもつだけの設備がちゃんと備わっている。

電気冷蔵庫も共同のがあって、中で貯蔵するものが混乱しないように六個ぐらいの金網のケースがはいっていて、それぞれ鍵をかけるような仕組みになっている。こんな老人ハウスの棟が三万坪ぐらいの構内に点在し、足の悪いおじいさんが車椅子にのってお婆さんに押してもらったりして構内を散歩する。こうして散歩するうちに老らくの恋愛の花を咲かせるものが時々あって楽しいランデブーを重ねるうち、最後にはめでたく結婚式に突入する。そんなとき収容されている老人たち一同はまるで自分のことのようによろこんで、青春をとりもどして大いに祝って楽しむのだ。

しかし一見天国のように楽しい老人ホームの有ようではあるが、残りの人生に見切りをつけて、自殺をはかるものも少くない。

それはいったいどうしたわけなのだろう。ホームにおける日々の生活がどんなに快適なものであっても、その

生活を楽しくしてくれる家族がいなくて孤独であったりなんら精神刺戟がない場合など自殺に踏みきるような事態にいたることが多い。

そこで老人ホームの生活がほんとに生きていて幸福だと思わせるようにするためには、どうすればいいかという対策についての実際面をつぶさに見学して廻った。この問題は迂遠なことのように思われるかしれないが、現に今秋の老人の日を選んでことさらに厭世自殺した老人ホームの老人が目立って多かった。わが国とすればいまのところ老人ホームを建設することだけがまだせいぜいのところで、厭世老人が出てくるのはこれからのことでそんな事件が多発しない前に、予めその対策を構ずべきだと思われる。

ストックホルムのサバッツベルヒ老人ホームでは、そのころ織機を備えつけて収容老人に使わせていた。自分で棉をつむいで糸をつくり、自分でデザインをして染色し、それからゴットンガッタンと機（はた）を織るのだが、機の前に座った老婆の顔を見ているとほんとに幸福そうな顔つきだった。こうして一貫作業で織布の工程を自分でやってみてこの上もない楽しさと、生き甲斐を感じ幸福感に浸っているのである。

テーブルセンターや、タピスリを織り上げ、ホームを参観に来たものに参考品としてやすい値段で売っているが、収入は本人の小遣いとか材料の費用にあてられる。訪問した時にはまだ試験時代だったが、たぶん昨今では織機もふえて、さかんに生産にたずさわっていることと思われる。

ここでは織布のほか籐細工もやっていた。さらにほかのホームでは陶器や木彫をやらせているところもある。

十年ほど以前のことだが、久留米絣を織る無形文化財を指定するために第一番の織工を調査したことがあった方々堪能な織布工をさがしたところ、最もうまい織工は久留米拘置所に収容されている無期徒刑囚だったということだった。しかし、人間国宝としては失格なのでついに指定をうけることができなかったが、沙婆の雑音をよそに、ひたすら織布に全生命をうちこみ、よりよい作品をと願いながら生命の灯をもやしつづけるその囚人こそ最も幸福な人間だったにちがいない。

文化のすすんだパリ市民は、アメリカの今日的なインスタント・ラーメン式文化を極度に軽蔑している。現在パリの一流ホテルの厨房では一切ガスの燃料をつかわないで、相変らずコークスを使っている。すぐ間に合うが風味や香りに欠けている罐詰の類も一切これを使用しない。アスパラガスも、グリンピースでもみんな生ものからうでて拵えてゆく。未来の幸福を、今すぐ実現したいという、せっかちな月賦制度が普及しているアメリカ人には合点がいかぬかもしれないが、一流ホテルはもちろんパリの一般市民でもこの傾向があるようだ。

日本でも、抽籤でアパートがあたると、最初は馬鹿に喜ぶのだが、四、五年も生活しているうちに何かもの足りないものを感じだす。そこで花屋から草花を買ってきて卓上の花瓶にさしてながめるのだがそれだけでは満足できないことに気がつく。たとえ一坪でもいいから草花をつちかい、一握の土を握ってみたいと熱望するようになり、ひいては鉄筋の高層アパートから脱出して、庭つきの家庭をもちたいと考えるようになるのである。

こうして生産の過程にたずさわることを「贅沢人」ということになってきた。

わたしはいたずらにチャーリー・チャップリンの〝われらに自由〟を繰りかえすわけではない。あまり結果をばかり求めたがる人間が多いから、カンニングで、卒業証書を入手したがる人間がふえてくるのだ。KN大学の同窓会雑誌を見ていると「わたしはカンニングで卒業した」と堂々と書いている卒業生があった。ここまでくると監督する先生が馬鹿に見えてくるのである。勉強するために大学に籍をおくのではなく一枚の卒業証書をもらわんがためである。いわば一種のインスタントラーメンにほかならない。

スギヤ

トア・ロード市電大丸電停前
TEL (33) 3436
六甲店・阪急六甲駅
TEL (87) 2731(呼)

神戸っ子のセンスを生かす

＊服飾 KEI の店

神戸・大丸前 服部宝生眼鏡店2F (33) 7550
大阪・堂島船大工町 日昭ビルーF (344) 6312~3

きものと細貨

おんがら屋

神戸

西　店/三宮センター街・電話3 3−8836（代）
東　店/三宮センター街・電話3 3−0629
三宮店/さんちかタウン・電話3 9−4303

東京

銀座北店/銀座並木通り・電話573−5298（代）
銀座南店/銀座並木通り・電話572−4847
（京阪神銀座タウン）
渋谷店/東急本店・電話462−3409（直）
（5階和装名家街）
日本橋店/東急日本橋店・電話211−0511（代）
（4階和装名家街）　（内線294）

神戸にそだって　70年

鳳月堂

元町3丁目　TEL㊴2412～5
さんちかスイーツタウン TEL㊴3455

「猟銃」が生まれたころ

■座談会

井上　靖<作家>　足立巻一<詩人>　竹中　郁<詩人>　写真左より

★親爺と私

竹中　今日のテレビで、中村光夫さんが佐藤春夫さんについて話をしていまして、その中で、佐藤さんの家は医者で、その医家と文学者の関係というのが話題になっていたのです。昔から医学をなさる人は知識階級で、医学者であり文学者である人はたくさんいる。その点、井上さんのお父さん（軍医少将）はどうでしたか？文学好きでしたか？

井上　全然そうではなかったのですね。

竹中　お祖父さんは？

井上　文学は無関係です。ただ、ぼくの曽祖父にあたる人が蘭学をやっていましてね、むしろ学者の血が流れているといえるでしょうか。

竹中　自然科学の方ですか、それともオランダ語？

井上　医学書を読むためにオランダ語をやったようです。

竹中　文学的雰囲気などは、全然なかったわけですか。蔵書はいかがでした？

井上　それも医学のものばかりで

竹中　佐藤春夫さんの場合は、文学者になるのをお父さんが、むしろ喜んだそうですが。

井上　佐藤先生のお父さんと、ぼくの曽祖父が、松本順のお弟子さ

んなのです。このことを椿八郎という人が調べてくれましてね。ただ文学の血は、ぼくの家には流れていないのではないですか。曽祖父は勉強家でして、朝の四時から机に向っていたほどです。父親も文学に関係のない人で私は父親と正反対になろうと思って生きてきて、おそらく非常に悲しい努力をかさねてきたのですが、今になると、全く父親と同じになりましたね。父親に死なれてみて、一層その感を深くしました。父親の持っていたものが、現在のぼくの中にでてきます。煙草の喫み方でも。時々ハッとしますね。ああ、また親爺がでてきたな、と考え方でもそうです。あんなに悲しい努力をしてきたのに、と思いますね。父親は軍医で、麻雀が好き、野球が好き、将棋が好き、それに勝負事が好きでした。ところが、私は全くそういうものにノータッチですから。これは、父親のやることはやるまい、と思ったからで、別に父親が憎いのではないのです。どうしてもこの親爺とは違った人間になろう、と思ったですね。ぼくは、ものごころついてから、なにか軍人が嫌いだったんかな。でも母親の方は許しますからね。自分のことをいえば、顔の上半分は父親で、下半分が母親で。それから、父親のよいところを貰って、母親の一面を貰っている。気の弱いことや、思いやりがあるのは父親からで、突き放した見方をしたりするのは母親のものですね。これは私ばかりではないでしょう。みんなそんなものでしょうね。

竹中　思いあたります。

★想い出を消し去る母親

足立　お母さんはお元気ですか？

井上　今年、二十日ばかり軽井沢にいきました。

足立　お元気ですね。まだ八十代でしょう。

井上　八十四です。昔のことしか頭にないのですね。それも自分が十四才ぐらいの時のことで、あとは皆不要なものはゴム消しで消し去って。ぼくの家内の母親は、八十五で死んでいるのですが、死ぬ前の二カ月というものは、全くの赤ちゃんになりました。女の人というのは面白いですね。ある種の型の人はそうなるんですね。

足立　お父さんの場合はどうですか。

井上　父親は八十一でなくなりましたが、ものすごくしっかりしていました。今、父親が生きていたら、どんなにいいだろうな、と思いますね。

足立　三年程前ですか、お母さんにお目にかかった時、傍で妹さんが、お母さん、いつも同じこと言って、といわれますと、お母さんが、年取って同じことをいわなかったらどうするの、とおっしゃって。

井上　うちの母親は強いですからね。

足立　山の上でも、下駄はいて走られますね。

井上　足の強いことでは、とってもかなわないです。普通に歩くというのでなく、駆けるんです。飛んで歩くのです。眼鏡をかけずに本は読むし、歯も耳もいいし、ぼくは大体においてかなわないですね。しかし面白いですね。母親に残っているのは、十四の時の記憶と香典だけですから。これは小説にも書きましたが、いつもハンドバックの中に香典帳が入っていまして。これは人生の貸借ですからね。人が死んでも別に悲しまないで、香典帳を開いて、田舎のこの人だと幾らだ、といって。母親は意識はしていないでしょうが、人間を考えてみますと、いろいろな夾雑物をとってしまえば、本当に香典だけが人間の関係を物語っているようですね。

足立　香典の話と、それに結婚式の話も書いておられたですな。

井上　母親は、娘さんに会うともう結婚したか、と聞くのです。結婚したと覚えている人には、赤ちゃんができたか、と聞く。結婚と出産と、香典で人生をまとめてしまうのでしょう。

竹中　私の母も九十二まで生きているが、香典じゃなくお金をいじくるのが非常に好きだな。

井上　私の方の母親は、お金を一切いじらない。何年もお金と無関係なのです。五十才ぐらいから、自分でお金

を持って買物に行ったということがない。村ではお金を持たずに買物をする、そして父親が払っていましたね。

竹中　そうですか。その点、ぼくとこは商売人ですからそれと都会暮らしだったせいもある。

★文学青年の時代はなかった……。ただ詩が好きで

竹中　あなたが文科に進もうとした時、お父さんはどうでしたか？

井上　私は一切自分でしたのです。これは小さい時から両親と一緒に住んでいなかったからでしょう。お金を送って貰っただけで、文句もいわずに勝手にさしてくれましたね。

竹中　ご両親は、あなたを信頼していたわけですね。

井上　信頼というか、どうですか。離れていたから、父親にあまり発言権がなかったのかもしれない。五ツぐらいから血縁関係のないおばあさんに育ててもらって、中学時代は寄宿と下宿で、高等学校は一年間だけ父親と同じで、あとは寮か下宿。大学で勝手に結婚して、これも一緒に住んでおれば両親も反対したかわからない。ですから科を選ぶ時、全く自由でしたね。

▲井上　靖氏

竹中　文学をやることに関しては、何の抵抗もなく大きな街道を通ったみたいなものですか。

井上　ぼくには文学青年の時代がなくて、ただ詩が好きで、その詩を書いている時は、長い間小説を書こうとは思わなかったですね。終戦後は小説を書こうと思いましたね。竹中さんもご存知のように。ある意味では、無理がなく現在に至っていると思います。修練時代というものは、小説に関しては持ってないし、そして早く作品を書いて作家として名を登録しようという気もおこらなかった。ただ終戦後に、「猟銃」とか「闘牛」を書くときはどうしても発表しようと思いましたが、それが既に四十三才ぐらいの時ですからね。高等学校は理科ですし、文学青年時代も、文学をやる友達もなかったです。新聞記者になって、竹中さんや足立君が友達になってからはじめて文学が話せるようになったのです。

★夢中になった柔道をやめる潔さ——四高時代

竹中　ぼくはあなたに非常にあきれたというか、感心していることがある。最初に「猟銃」を見せて貰ったときぼくが、井上さん、ここ直したらどうや、いったら、あくる日に初めから終りまで書き直してきたね。ああいう粘りはどこで身につけたもの？

井上　この作品こそはと思う時は、その程度の努力は誰でもするでしょう。夢中になるところが私にはありますね。一番夢中になったのは柔道です。高等学校の三年間は全く柔道に終始して。これも練習量がすべてを決定す

▲ 足立巻一氏

すからね。

足立　大学でも柔道はされてたのですか。

井上　いえ、むかしの高校柔道の面白さは、高校卒業と同時に柔道をやめる潔さなのです。段をほしいという気持もなく、ただインターハイで勝ちたいと思うだけです。

竹中　私は小学校の時から剣道でしたが、中学校へ行ったら胴具がくさくてね。皆が共通に使うものだから。それで嫌になって、一年生だけでやめました（笑）

足立　竹中さんはテニスの感じだな。

井上　今日も大阪で、国際連盟協会の集まりで〝中国とロシア〟の話をするところが、実際は柔道の話ばかりしてしまって（笑）

★幻の名馬・汗血馬をたずねて——西域物語

竹中　この間ソビエトに行かれた時は辺鄙なところばかりでしょう。

井上　モスクワ・レニングラードと、あとは中央アジアです。

竹中　ソビエトは招待ですか。

井上　ロシアは招待旅行でしたら、どこも見られません新聞社が特派員を出すときはノボスチ通信社を通すのですが、ぼくは個人でノボスチに通してみたのです。行き先を出しましたところ、三カ所ぐらいは消してその他は行ってもよい、ということになったのです。そのかわりノボスチの記者を丸抱えして、日当も旅費も出すのですぼくの場合は、その記者が通訳でもあり、案内人でもありますね。今度行ったところは、旅行者として誰も入っていない初めての所ばかりです。

るという柔道をしていたのです。夏は少し家に帰ることもあるのですが、あとは全く帰らずに合宿です。のべつ柔道をしていた。学校でも特別に卒業させてくれたと思うのです。日本の柔道の寝技は、十八・九の非力な青年がつくったものです。立ち技ですと、勝負は相手との力関係であり、それも一瞬にきまることがある。ところが寝技ですと、これはただ練習量だけになる。あの頃の高校生には講道館も歯がたたなかった。試合になってお辞儀をしたら、もうあとは這っていくのですからね。むかしの高校柔道はおもしろかったですよ。

足立　文学にも、立ち技、寝技というのはありませんか

井上　ぼくは文学では寝技をやっているんでしょうね、きっと（笑）初め立っていましたが、最近は寝てますな柔道というものは、立ち技と寝技の表裏でその間に勝負がきまるものなのです。今は優勢勝ちというのがありますが、このルールは変えなきゃいけない。たとえいくら攻められても一本取られないのも、ある意味での強さで

ヒワという全く砂漠ばかりの町に行きました。これは別冊のサンデー毎日に写真を載せていますが、ヒワというのは、ヒワ汗国としてロシア領になるまでは非常に有名な国です。コウカンド汗国、ヒワ汗国、ブハラ汗国と中央アジアに三つの汗国があったその一つです。全部砂漠の町です。そこの、そう古い遺跡ではないのですが、汗国時代の遺跡を町ぐるみ保存しようとしています。サマルカンドとか、ブハラとかは世界的な観光地になっていて遺跡が遺っているのですが、それは部分的なのです寺院だとか修道院だとか、学校だとか。ところが、ヒワの場合は全部遺そうとしている。現在修復の最中ですが普通はなかなか入れてくれないのに、ノボスチの記者のおかげで見ることができました。それからフェルガナというところに行きました。ここもまだ人が入っていません。加山さんという考古学者がモスクワ大学にいて、一人だけその町に入ったそうです。フェルガナは、大昔西紀百年ぐらいですか、漢の武帝の時、大宛国といいまして、大宛国の汗血馬というのが天下の名馬です。武帝時代に中国から正式に張騫というのが、はじめて中央アジアに入った。今のブハラまで行っての帰りの報告で、大宛という国には天下の名馬、汗血馬がいる、と述べたのが、フェルガナが中国に知られた最初なのです。張騫が死んだ後、武帝が名馬を欲しくてたまらなくなり、大宛に名馬を貰いうけに遣るのです。自分の非常に愛していた若い李夫人の兄の李広利にとりにやらせる。その馬は大宛の貳師城というところにいたので、李広利に貳師将軍という称号を与えた。ところが貳師将軍李広利は、戦争に負けて帰ってきた。大宛の国境から中へ入れて貰えない。それが一年目に、今度は用意万端を整えて大軍を率いて攻めて行って、戦いに勝って馬をつれ帰る。名馬数十頭に、並の馬数千頭を戦利品とする。この大宛の汗血馬のいた貳師城の記述が「史記」にあるのですね。「史記」の「大宛伝」に。貳師城のことを宛都としているのです。もう一つ「漢書」に依りますと、都は貴山城となっている。それで貴山城と貳師城はどういう関係かが問題となった。大宛の都を、ある時期に貴山城と呼び、ある時期に貳師城と呼んだのかもしれない。それにしても、大宛の都はどこだろうか、ということが世界的な論議の的となった。日本では、桑原隲蔵、藤田豊八、白鳥庫吉が三つどもえの論争を起している。フランス、英国、ドイツなどあらゆる国がこの論争に参加し、主張する都の場所が全部違うのです。世界的な学者が、これこそ貴山城だ、貳師城だ、と言っているのですがこれがまた一人もその大宛、すなわちフェルガナに入らないでの論争なのです。学者というのは不思議なものですね。たとえば、李広利の戦いの記述の

▲ 竹中　都氏

中で、「渠」という言葉があるのですが、この「渠」、すなわち堀割りが河だと主張するために、「渠」がいかに河であるかの証拠を、中国の史書から持ち出してくる。しかし、誰もあたっていないと思うのです。ロシヤが、七、八年前ある岩壁から馬の絵を発見した。その周辺を掘って調査すると、戦闘の記述に合うような内城もあり外城もあるところで、ここが都だろうとしているのですところが、そこは今までの論争の場所とは全く無関係なところです。しかし、この論争がまちがっていたにしても、このため学問的な研究はずっと進んだのですね。たとえば里程の決め方など、あらゆることが、この大宛論争で進歩しています。

天山山脈とパミールが、中央アジアをソ連側と中国側に分けている。中国側を東トルキスタン、西側を西トルキスタンというのです。どちらも永久氷河のあるところで、その天山とパミールの間を張騫が遠征して、中国に大宛国を伝えたのですが、その前から人は往来していたらしい。越せないような山ですが、人は通っている。

足立　汗血馬というのは、皮膚が非常に薄くて静脈が透き通っているのだと聞いたのですが、どうでしょうか。

井上　どうなんでしょうね。

竹中　馬の寸法とか、形とかが城壁に残っているのですか。

井上　絵姿になっているのです。実にスマートな馬です雌雄の馬なのです。これは竹中さんがご覧になれば、これは洒落ていると言うに違いない素晴らしい馬です。朝日新聞の「西域物語」にも載せますが。

★神戸の街は暑かった。街並は印象的だった。

足立　今日はじめて伺ったのですが、井上さんのお子さんのひとりは神戸で生まれたそうですね

井上　神戸で死んだのですね。法然院に葬ってありますあれは、茨木時代に、家内の父親が大学の先生でしたから茨木に近い専門的な病院ということで、神戸の病院に入れたら、月足らずで子供を生みまして、十何日目かで死にました。そのまま名前を付けなければよかったのですが、あまり家内が悲しんだので死んでから名前を付けて、法然院に葬ったのですね。戦争中でとても自動車のない時ですし、ぼくはその死んだ子を抱いて神戸から京都まで電車に乗ったのです。抱いていると、人が何となくのぞきにくる。真暗な混んだ電車で、何となくのぞきにくる感じがするのですね。死んだ子を抱いているのはいけないのですが、とにかく京都へ運ぼうと思っていただけで、それが人にのぞかれるのがいやでした。

足立　神戸の空襲前のことですね。

井上　昭和十八年ですから。

足立　井上さんと神戸のつながりは、どの程度ですか。

井上　神戸が空襲で焼けたのは茨木からよく見えました一番はじめ神戸に来たのは、ぼくが中学時代に父親が台湾の軍隊につとめていまして、夏休みに遊びに行ったのです。その時、神戸から船に乗りました。その後一・三回行ったのですが、船の名前はよく覚えております。香港丸、信濃丸。

竹中　高砂丸。一万屯クラスでしたかな。

足立　その当時の神戸の印象はどうでしたか。

井上　とても暑い時で、冷たい、飴みたいなコーヒーがほんとにおいしかった。そこらをウロウロしていたのでしょう。それから西宮にしばらく住んでいました。結婚してすぐですが、西宮病院の近く、香蘆園という駅がありました。その時は、ときたま神戸に出ましたね。

足立　街としては好みに合いますか。

井上　戦争が激しくならない前の神戸の街は、実に独特でした。元町から三宮にかけての街並は印象に残っています。

足立　「三宮炎上」を書かれたときは、神戸によく来られたのですか。

井上　いまは日展社長の小林敬三さんを知っていまして戦争直後は彼がビールを集めたりしていたので、神戸に

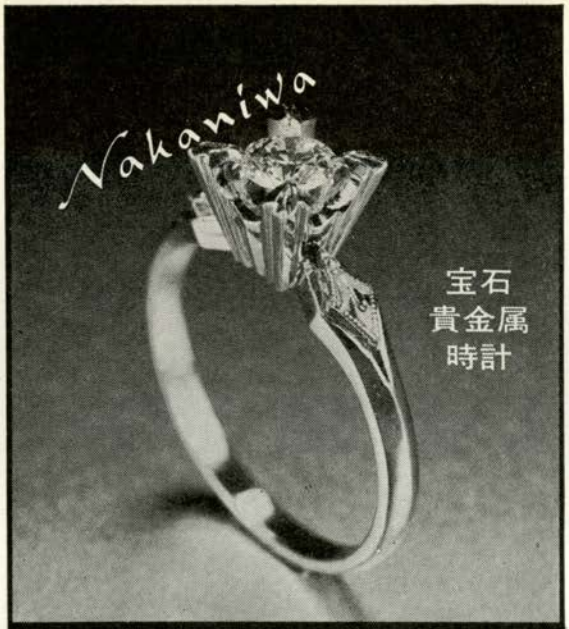
こんにちは赤ちゃん〈6〉

東灘区　高士淑世ちゃん

完全看護★暖房完備★病院前駐車可能

芦屋 柿沼産婦人科

芦屋市大枡町９番地
国道芦屋川電停東50米（明治生命南）
☎芦屋（0797）２－2139・２－4087



仲庭

さんちかタウン　(39) ４５９３
梅田新道 堂ビル北(364)8121代表
梅田阪急前(御堂筋東側)
(313) 0512代表
桜橋 毎日新聞社前(341)0412
新大阪ステーションストア
大阪ロイヤルホテルセイコーショップ

Merry Christmas

クリスマスケーキのお予約はお早めにどうぞ

北欧の銘菓

ユーハイム
コンフェクト

本社・工場及熊内店/神戸市葺合区熊内町1(市立美術館東隣)　TEL22−1164
三宮センター店/神戸三宮センター街(洋菓子・喫茶・バーラー)　TEL33−2421
生田店/神戸三宮生田筋(階上喫茶室)　TEL33−7343・0156
さんちか店/神戸三宮地下街スイーツタウン　TEL39−3558

クリスマスのおくりものは
カメヤのおもちゃで

カメヤ おもちゃの カメヤ

三宮方面でのお買物は……
さんちか店　ファミリータウン　㊴ 4045
三宮店　センター街大洋劇場東隣　㉝ 4969
元町方面でのお買物は……
元町店　元町通3丁目山側　㉝ 0090
パンプウ店　元町通1丁目不二家前　㊴ 0768

はよく来ましたね。戦災時の三宮は知らないので、前のイメージで三宮を書きました。

★童詩に惚れた「きりん」時代

足立　「きりん」の時は、井上さんが始めたのですが、どういう風に始めたのですか。

竹中　井上さんは、「きりん」の発行者尾崎橘郎さんとどこで知りあったの。

井上　ぼくの方が竹中さんより早いですか。

竹中　あなたがぼくの耳に入れたのは、中学生の雑誌を出したがっている出版屋があるから、竹中さんやりませんか、ということだったのですが、私の方は中学生はとても自信はないから、小学生なら引受けましょう、と返事をしたのです。

足立　私も井上さんからいろいろ聞いたことを、ウロ覚えで書いているのですが、はっきりしとこうと思いまして、私が聞いたのはこうなんです。尾崎さんが知り合いを通じて文化新聞を出したい、というのを、毎日新聞学芸部副部長のあなたのところに頼みにきた。そうすると文化新聞みたいなものはとてもできないから、子供の雑誌を出したらどうか、と聞いたのですが。

井上　きっとそうですね。

足立　最初は「タンポポ」という名でしたかね。

井上　「きりん」というのは、竹中さんがつけたのです「きりん」とはいい名だな、と思ったのを覚えています

足立　あの頃の子供の詩は覚えておられますか。

井上　覚えております。あの頃は天才がいましたね。白石欽也、宗次恭子など、ほれぼれする名前ですね。あの時はみんなほれちゃったです。いい詩を書いてますね。

足立　あの頃、なぜ井上さんがあんなに子供の詩に惚れられるのか不思議でしたよ。

井上　しかし、ぼくはすぐに東京へ行きましたが、足立さんや竹中さんが、その後大変な仕事をしましたね。童詩の世界で実に立派な仕事を残しました。

竹中　我ながら根気よく仕事をしたと思うね。

井上　それは大変なことですよ。今年あたりはどうなんですか。何か一つの形になっては出ないのですか。

竹中　「定本きりん詩集」「きりんの綴方」「きりんの教室」という三冊を出す予定です。創刊以来のいい作品ばかりを選んで。

井上　「きりん」は大いに表彰されないといけませんね

★詩の集い・戦後交友録——「闘牛」「猟銃」の頃

足立　戦後神戸で「火の鳥」という雑誌を覚えておられますか。

井上　小林さんのですね。ぼくはあれにも何度か詩を書いてます。「火の鳥」はないですが、小林武雄さんはどうしておられますか。

竹中　達者ですよ。

足立　この間詩集を出して。

井上　竹中さんと足立君、この三人でこうして話をするのはいいですね。何を話しても誤解されないし。いいたい事をいっても良いし。こういう時間はめったにない。

昭和二十一年頃でしたから、もう二十年も経っています。

足立　競馬にも連れて行って貰ったし。

竹中　井上さんは今でも競馬に行きますか。

井上　今はもう全然行きません。あの頃は毎日新聞の記者で、実にズボラな新聞記者でした。

足立　借金をずいぶんつくって。

井上　どうしてあんなに借金ができたか、と思うほどの借金でした。社で二番目ぐらいでしたか。別にそれほど使った覚えはないのに、なんでお金がなくなるのですかね（笑）

足立　借りだしては清算をしなかったんでしょう。

井上　でもあの頃はいい時代でしたね。コーヒーを飲みながら、なにか文学の話をしていました。

「きりん」ができた頃は、終戦直後で、その雑誌を出

すことがぼくたちの気持の中心になっていたようですね。初めから毎月一冊でした。子供の詩を読んで選び、感想を書いたり、随筆を書いたりして。尾崎さんには随分世話になりました。ちゃんと原稿料をくれて、立派なものでした。

竹中　今の産経新聞の裏の横丁に事務所がありましたねその家で風呂が湧くんです。木箱の屑ができて、これで風呂をたく。時間が遅くなると食事がでる。家族も一緒に食べるのです。

足立　奇妙な戦後の縮図みたいなものがありました。

井上　ぼく自身が小説家になる前の時期ですけれど、一番いい時期でした。あれほど純真に童詩を選んだことはなかったです。尾崎さんを中心に、竹中さんがくるし、足立君がくるし、時には坂本遼さん、小野十三郎さんも来られました。ぼくがああいうところから文学を出発したのはとてもよかったと思っています。小説家が集まって批評し合うというのでなく、詩の集まりですからね。それも童詩でしょう。竹中さんも、どんどん詩を書いておられた頃ですね。あの時の詩集は「動物磁気」でしたね。あのいい時代に、ぼくは小説を書こうかという気になったのです。皆に見てもらうんですよ。

足立　生原稿ですね。

井上　生原稿で見せても、なかなかいい点をくれないのです。

足立　竹中さんと尾崎さんは酷評でしたよ。ほめたのは僕ぐらいで（笑）

竹中　よう憶面もなしに批評したと思いますね（笑）

井上　いや、そんなことはありませんよ。それはちゃんとした批評でしたよ。あの時は、ただ自分の信頼している囲りの人に読んで貰おう、と思いました。ですから文章を直し、かきかえてもいるわけです。「猟銃」や「闘牛」をそうして発表したら、たまたま当ったわけです。

竹中　「猟銃」の時、二回書き直してぼくの所に持ってきて、これで大丈夫ですね、と念を押しましたよ。ぼくが見た以上大丈夫です、といわざるをえないし（笑）

足立　尾崎書房には源氏鶏太さんも来てましたね。秋芙美子さんもいました。神戸の推理小説の草分け山本禾太郎さんも来ていたね。

井上　尾崎さんを囲む会を一度もちたいですよ。尾崎夫婦を呼んで。

足立　あの時にいた小さい子が、今では関西学院大学を卒業しましてね。

井上　そうですか。随分ぼくは抱いてやったが。

足立　安西冬衛さんの日記を見てましたらね。「尾崎書房へ行く。足立君に百円貸す」とあるのですわ（笑）全然覚えてないのです。返した覚えもないけれど（笑）尾崎さんは、四国の人で、東宝の助監督をしていたね。あの時分は、小磯良平さんや、吉原治良さん、脇田和さん須田剋太さんとか、実に一流の画家が安い画料で表紙や装画をかいてくれました。

あの時代は、周囲が荒涼としていただけに、懐しい美しい時代でした。焼野原にバラックの二階建をたてて、私は会社が近いから、さぼっては行って井上さんや、竹中さんと話をしていました。毎日入りびたりでね。井上さんに童話を書けといわれてかなり書きました。

★おりている新聞記者——毎日新聞学芸部時代

井上　あの頃は新聞社も呑気な時代ですね。ぼくはデスクをやってたんだけれど（笑）

竹中　天王寺かどこかでの集いで、井上さんもおられましたね。

足立　安西さんの詩集の出版記念会です。伊東静雄さん小野さんもいました。その時の写真を見ましたら、井上さんはあの時、すさまじいほど痩せておられたですね。当時の飢えがそのままでているのです（笑）井上さんが買物をすれば、いつも卵と鰻で。

井上　その時は家内が疎開をしていましたので、一人で

したけれど、実に面白かった時代でした。新聞社もいい時代で、何の屈託もなくて。

竹中　その頃の新聞記者時代と今の新聞記者を比較して新聞記者気質というものに変わりはありますか。

井上　新聞記者気質というものには、変わりはないでしょうね。しかし、あの頃は不思議な新聞記者がいましたよ。ぼくのいい方では、おりている新聞記者ですね。新聞社で偉くなることは全然考えていない、というタイプです。ぼくなんかもそうだった。デスクでも午後から、それも四時頃に出て、仕事をさっと片付けて後は勝手なことをしている。半分はそういう記者でした。こういった面白さは今はないでしょう。ぼくが新聞社に入った時一年先輩が、君は、今後酒を飲んでも一切金を払ってはいけない、といいました。全部おごって貰いなさい、この部以外の人には、一切頭を下げてはならない。事実ぼくはその人たちとコーヒーを飲んでも、お金を払った記憶が全然ない。あの頃は生活が楽だったんでしょうね。毎日のように飲んでいました。他部長には全く無関係でやって行けたのですから。ぼくが社に入って一番おかしいことは、ぼくが洋服をつくる、と友達にいったらその友達が、洋服のことは編集局長か局次長だか忘れたが、その人が社内で一番詳しい、というんです。入社して二年目に、その人の所へ行って洋服屋を相談しに行ったのです(笑)「洋服屋を紹介して下さい」と。イタズラですね。そのえらい人は変な顔をしましてね(笑)名前も知らない下端がきて、洋服屋を紹介してくれ、ですから。

足立　井上吉次郎さん(井上氏が入社当時の学芸部長)には会われますか。

井上　会います。あの人はぼくの恩人で、全部あの人のおかげです。美術も宗教も。社に入ってしばらくしたら宗教欄をもって教典の解説をしろ、というのです。ぼくはそんなものはできないと思ったけれど、鶴の一声ですからね。二年近く続きましたかね。般若心経に、華厳経あらゆる経典の解説をして、もうちょっと続いていたら百科事典にでも書いていたのでしょうが。正直ですから全部読んだのです。それで、お経が随筆でもあるし、劇でもあるということが解りました。経典がどういうものであるかを知りましたね。その解説を横浜の出版社が一冊にしたい、といってきて家内に相談したのですが、お経の解説じゃ、ということになって(笑)

足立　それが出ていたら処女出版ですか。

井上　ええ。今考えると、出しておいたら面白かった、と思うのです。あの時は、なんとなく詩集でなくちゃ出したくない気がありましたから。

足立　西域のことは、いつごろですか。

井上　学生時代ですね。桑原隲蔵先生は、ぼくが京大に入った前年に出られています。あの時代は戦争に入るときですから、そういった地方に対する関心がありました

★関西に根をおろすユニークな作家

足立　井上さんから見て、関西の文化というものは、どういう風に思われますか。

井上　関西の文化はわかりませんね。神戸には、陳舜臣さん、田辺聖子さん、白川渥さんがおられる。大阪には司馬遼太郎さん、黒岩重吾さん、藤沢桓夫さんがおられるし、ぼくらの時は、藤沢さんぐらいでしたね。非常にいいことですね。地方におられるということは。もっともっといないといけないんでしょうね。今は、関西ジャーナリズム、東京ジャーナリジムというものはないでしょう。どこにいても、いい物を出せば評価されるのだと思いますね。ぼくも今度、短編集を京都の人文書院から出しますし、今は仕事さえ良ければ、距離が近くなっているのですから、関西ジャーナリズムというものはないでしょうね。大阪からは大阪風の作家、といった分け方は意味がないと思います。狭いところだから、大阪にいたからといって、大阪のいいものを持ち続けるわけでもないでしょう。

(文責・編集部、コラルキタノにて)